オルダム綿紡績会社設立ブーム

オルダム有限会社を核に、イギリス綿紡績企業を論ずる場合、「オルダム有限会社」がどの程度重視されるべきかを正確に説明することは、おおむねここに示したもので、それを決定するための基準は、オルダムの経営構造やそれに伴う経済体質を確実に把握し、それを基に論じることが必要である。次に、当該時期にイギリス綿紡績企業を論ずる場合、「オルダム有限会社」を核に論じることの妥当性を数値的に考察すると、このための基準は、やはりオルダムの経営構造やそれに伴う経済体質を確実に把握し、それを基に論じることが必要である。
第1表 ランカシャの紡績とその分布

<table>
<thead>
<tr>
<th>企業のない紡績数</th>
<th>紡績数</th>
<th>企業のない紡績数</th>
<th>紡績数</th>
<th>企業のない紡績数</th>
<th>紡績数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1882</td>
<td>1,948</td>
<td>38,410,067</td>
<td>1887</td>
<td>1,778</td>
<td>40,946,709</td>
</tr>
<tr>
<td>1892</td>
<td>1,760</td>
<td>42,061,287</td>
<td>1897</td>
<td>2,709</td>
<td>38,140,220</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* 註(2)を参照のこと。

当時のオルダム企業の多くは既に六〇年間に三〇〇万錬を記録していたが、万錬はランカシャ平均を成し上部しているものである。このようにオルダム地域の増加は新設公会社の誕生に伴うものである。これに対し中規模の太平洋地方における紡績数の増加は、個人的な経営の増加を示している。このことから、ランカシャ地域における紡績数は増加するものの、その増加速度は緩やかであることが示唆される。
（19）オルダム紡績会社設立プーム

この紡績会社の世界的な規模での生産の理由は、田村に求めるのは、経済史的には興味ある問題であるが、ここでは触れらない。指摘すべきことは、「オルダム有限会社」がギリシャ紡績業において極めて重要な役割を占めていることである。

（1）「オルダム有限会社」は、オールド・リミテッドと呼ばれる会社である。1852年に設立された。この会社は、紡績業界における革新を遂行した。

（2）オールド・リミテッドの役員は、紡績業界の革新を遂行した。この会社は、紡績業界における革新を遂行した。

（3）この会社の役員は、紡績業界における革新を遂行した。この会社は、紡績業界における革新を遂行した。

（4）この会社の役員は、紡績業界における革新を遂行した。この会社は、紡績業界における革新を遂行した。
オルダム地域絹紡績会社設立の流れ

1873年 1874年 1875年

(社)

15

10

5

見分れ、将来紡績統合がメリットを発揮するという見込みから絹紡績は保存され、結果これらを利用する機会は訪れなかった。また、オルダム絹紡績は絹紡績が初発から紡績企業として計画されたとしても、何ら怪しみに足りない。八〇年代中葉に絹紡績企業が好況に酔った時、絹紡績工程への進出が多くの企業の株主総会で盛んに論じられた。しかしこれが実現しなかった理由の一つは、これら先行企業の経験であった。
第2表「オルダム有限株式会社」の先駆企業

<table>
<thead>
<tr>
<th>会社名</th>
<th>設立年</th>
<th>資本金</th>
<th>増資後資本金</th>
<th>建物</th>
<th>払込金 (1873)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Sun Mill Co.</td>
<td>1858</td>
<td>£ 6,000</td>
<td>£ 20,000 (1860)</td>
<td>£ 5</td>
<td>£ 5 - 0 - 0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>£ 40,000 (1862)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>£ 50,000 (1864)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>£ 75,000 (1867)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Oldham Twist Co.</td>
<td>1867</td>
<td>£ 20,000</td>
<td>£ 25,000 (1868)</td>
<td>£ 20</td>
<td>£ 10 - 0 - 0</td>
</tr>
<tr>
<td>Central Mill Co.</td>
<td>1869</td>
<td>£ 25,000</td>
<td>£ 5</td>
<td>£ 5</td>
<td>£ 2 - 0 - 0</td>
</tr>
<tr>
<td>Royton S. Co.</td>
<td>1871</td>
<td>£ 20,000</td>
<td>£ 30,000 (1871)</td>
<td>£ 5</td>
<td>£ 4 - 0 - 0</td>
</tr>
<tr>
<td>Greenacre C. S. Co.</td>
<td>1871</td>
<td>£ 30,000</td>
<td>£ 40,000 (1872)</td>
<td>£ 5</td>
<td>£ 4 - 0 - 0 **</td>
</tr>
<tr>
<td>Green Lane C. S. Co.</td>
<td>1871</td>
<td>£ 50,000</td>
<td>£ 65,000 (1875)</td>
<td>£ 5</td>
<td>£ 5 - 0 - 0</td>
</tr>
<tr>
<td>Woodstock Mill Co.</td>
<td>1872</td>
<td>£ 25,000</td>
<td>£ 50,000 (1874)</td>
<td>£ 5</td>
<td>£ 4 - 0 - 0 ***</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* 1860年に£ 5の増資に変更
** 旧株式発行
*** 1874年の数字

この表は、19世紀初頭の工場経営の紡績の経験を示している。八三五年と九二二年の小規模な紡績を経て、前述した合併合組経営などを通じてより面世のある者であり、時に取締役会が形成された。彼らの紡績経営の歴史が応募状況に大きく作用した。工場選地立会は経営の観念を第一に掲げ、株式取締役の選出が行なわれ、あるいは数ある経営者が集まる。
(25) オルダム縄紡績会社設立グーム

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>1870年代</th>
<th>1880年代</th>
<th>1890年代</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>企業数</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第3表 第1次ブーム期（1873-5）設立の紡績業（20社）の解散

工場経営の購入、「ローン」の受信などに解消に追い込まれた企業（第3表の大部分について）は、その直接の原因が資本調達能力の欠如であった。それゆえ、資金調達力が不充分ということが、このブーム期に成立した企業の多くを押し倒す主な要因となりました。

なお、このようにして発足した企業が、その資金調達能力の欠如に悩まされておりました。外資の経済能力が問題である場合は、資本調達のための資金調達力が不足していることもあっただけで、資金調達力の不十分による資金調達の困難を抱えていたのです。


百パーセントの新設を予定した設備投資をしたものの、資金調達の難しさにかかわらず、高利を支払う必要がありました。また、期待通りの株式価格が見込めず、最終的に解散に追い込まれた企業が多かったのです。
新会社の株式が売却し、同時に買手が企業を再編することから生まれた利益と、これに対応する四箇条に、一覧したところ、「高価な利益」という表現は、これらの利益を反映しているものである。また、これらの利益は、全体的な企業の価値を増加させるために、買手が企業を再編することから生まれた利益と、これに対応する四箇条に、一覧したところ、「高価な利益」という表現は、これらの利益を反映しているものである。
オルダム紡績会社設立ブーム

（27）

紡績会社は解散の意味するものは、当時紡績業の経営が極度に危険な高さまのであったことではない。むしろ逆である。既に会社法の施行直後に登録された企業の死亡を検査した先学の調査に従っても、紡績業会社の経営では、他の業者と比較すれば異例と言える程度にかない。印度・中国市場が急速に拡大しつつある時、壊滅的な企業様式を駆逐して経営を維持するのは、さしつかえる企業者精神や広いビジネスの平圧を必要としなかったと言える。

協同組合運動がそうであったように、紡績業新設の大義名分とあったもので、地域の雇用促進であった。従ってその必要性は、他地区の場合にもこれに対抗して経験するというように相互競合のため的ゲームを形成した。Oldham Chronicle, 1883, May 5, 1886.

（6）このイングランド北部特にマンチェスターに始まった紡績業者の組織は、新設に関する問題を考慮に入れたものである。紡績業の経営は、従業員の利益と業者利益を調和することが必要である。協同組合の制度として、この組織は、組織者や従業員の利益を確保することを目的としている。なお、この組織は、従業員の利益を保護することを目的としている。
(3) 1883-1884.
A. Y. Vol. 12, 1931.

(5) H. A. Shayman. The limited Companies of 1866.
既に三年のブームの第二段階においても、小株主に配慮したオルダム型紡績企業の新設工場建設が盛んに見られた。しかし紡績工場建設のラッシュが始まったのは、第二段階の七四三月以降である。この月だけで九州企業が登録され、そのうち二社引継ぎ企業を除けばすべて新規の株式会社であった。そのうちの一社、株式数一〇〇〇株のうち九〇〇株が名義変更を行なう一方、六〇〇株は引き続き名義変更を実施するという。

結局決議しているのは、七五五月の一月だけに限られている。それまで工場敷地の不足、工事費の値段が決して安らかでなかった。一方で工場敷地の不足、工事費の値段が決して安らかでなかった。一方で工場敷地の不足、工事費の値段が決して安らかでなかった。一方で工場敷地の不足、工事費の値段が決して安らかでなかった。一方で工場敷地の不足、工事費の値段が決して安らかでなかった。
第4表 織織布株式会社の設立資本
（オルダム地域・1873−5年設立）

<table>
<thead>
<tr>
<th>資本（£）</th>
<th>社数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>20,000 以下</td>
<td>6 (社)</td>
</tr>
<tr>
<td>20,001−25,000</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>25,001−30,000</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>30,001−40,000</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>40,001−50,000</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>50,001−60,000</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>60,001−70,000</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>70,001−80,000</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>80,001−90,000</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>90,001−100,000以上</td>
<td>5</td>
</tr>
</tbody>
</table>